

賃労働者の向自有的論理構造

梯 明 秀

—『資本論』における哲学的思惟の端緒

近代市民社会を学問的体系として把握するための方法論的端緒は、したがつて、マルクスの『資本論』における学問的思惟の出発点は、この『資本論』において現にその叙述の端緒をなしているところの、対象的な物としての商品——これは『資本論』が経済科学であるという一面において、その科学的思惟の出発点であるに相違ないとしても——でなくて、人間としての商品、すなわち、賃労働者でなければならない。これが、わたしの年来の主張である。マルクスが『資本論』の叙述を始めるにあたつて、商品の分析を出発点にしているのは、物としての商品をわれわれの意識の外に対象として前提し、その現象諸形態の背後に本質的実体を抽象するという下向的な科学的思惟が、一般にとらざるえない方法論にしたがつたまでのことであつたにすぎない。『資本論』が経済科学であると同時に哲学であるという学問的構造にあつたものとして、かかる学問的思惟の出発点は、右のように規定すべき論理的必然性をもつてゐるのである。そして、このわたしの主張の意味するものは、実質的には、ただ、『資本論』が賃労働者の立場から執筆され展開された体系的な一つの思想である、というだけのこと

である。

ところで、いま、近代市民社会のかかる科学的研究を、マルクスが賃労働者階級の立場において計画し実現したというばあい、何ゆえに賃労働者階級の立場から始めねばならなかつたか、ということの必然性の論証が必要である。すなわち、近代市民社会にたいする科学的思惟を必然的なものとして媒介したところの、より根源的な思惟が、すなわち哲学的思惟がマルクスにおいて先ず直接的であつたはずであるが、そして、この直接性こそは、『資本論』の学的体系の論理的出発点であつたはずであるが、このような科学的思惟を主張すべき哲学的思惟の端緒については、『資本論』の体系的叙述の何處にもマルクスは論述していない。にもかかわらず、『資本論』が学的体系であるかぎりでは、ヘーゲル哲学の全体系において、その端緒が方法論的重要性をもつたと同じく、それは『資本論』の全体系においても軽視しうべきはずのものではない。とすれば、その体系的叙述の表面において何處においても直接に論述されていないにしても、この表面の何處かの背後に、問題として秘んでいるところが、いな賃労働者の立場に立たねばならないという必然性は、体系を構成する原理そのものとして、叙述の全体を内から規定しているというべきであるが、しかし、この本質的原理の露頭ともいいうべきものは、叙述の何處かにおいて発見されうるはずだとせねばならない。

さて、賃労働者が学問的思惟の出発点としての論理的資格を『資本論』の学的体系性そのものにおいて求むべきであるというばあいの、この賃労働者が、人間として商品であるということは、いうまでもなく、労働市場における事柄である。ところで、この労働市場が『資本論』において、分析されている個所は、第一巻、第二篇、第四章「貨幣の資本への転化」であつた。したがつて『資本論』を学的体系たらしめていたところの、学問的思

惟の出発点というその方法論的原理が、その叙述の現象面に示している露頭は、同じく、この個所において発見されねばならないことになる。そこで、この第四章を通読すると、その第三節において、次のごとく述べられている。

——「貨幣所有者が、商品としての労働力を市場に見いだすためには、種々の条件が充たされねばならぬ。商品交換は、それ自身の本性から生ずるもの以外には、絶対的に何らの依存関係も含んでいない。かかる前提のもとでは、商品としての労働力は、ただ、それがそれ自身の所有者——それがその人の労働力であるところの人物——により、商品として売却または販売されるかぎりにおいてのみ、また、そのゆえにのみ市場に現われるうるのである。労働力の所有者が、それを商品として売るためには、彼は、それを自由に処分することができなければならぬ。彼と貨幣所有者とは市場で出合い、同じ身分の所有者として相互に関係をむすぶのであって、かれらの異なるところは、一方は購買者であり他方は販売者であるという点だけであり、かくして両者は法律上、平等な人格である。この関係が続いてゆくためには、労働力の所有者が、それを何時でもただ一定の時間、きめに売るということが必要である。けだし、もし、彼がそれを一縛めに一度きりに売るならば彼は自分自身を売るのであり、自由人から奴隸に、商品所有者から商品に転化してしまうからである。人格としての彼は、いつでも自分の労働力を自分の所有物として、したがつてまた、自分自身の商品として取り扱わねばならぬ。そして、彼がそうなしうるのは、ただ、彼が労働力をば、その購入者をして常にただ一時的にのみ、一定の期限つきでのみ、自由にさせ消費させ、かくして、労働力を譲渡することによつては、労働力にたいする自分の所有権を放棄しないという、そのかぎりにおいてのみである。

貨幣所有者が労働力を市場で商品として見いだすための第二の本質的条件は、労働力に所有者が自分の労働の対象化された商品を販売しえないで、自分の生きた身体のうちこのみ実存する自分の労働力をそのものを、商品として売却しなければならぬということである¹⁾。――

要するに、マルクスも約言しているとおり「貨幣を資本に転化するためには、貨幣所有者は、自由な労働者を商品市場に見ださねばならぬのであつて、ここに自由とは、彼は自由な人格として自分の労働力を自分の商品として処分するという、また他方では、彼は売るべき他の商品をもたず、自分の労働力に実現に必要な一切の物象から引き離されているところの自由であるという、二重の意味においてである」ということが、そこに積極的に主張されている。この主張には、マルクス経済学が古典経済学から自らを質的に区別せしめるところの重要な思想が含まれていること、すなわちリカルド学派が価値論において陥つた解決不可能な袋小路から脱出するための、それとともに、新たに剩余価値の法則を樹立するための、根拠になる思想が含まれていること、このことについては周知の事柄にぞくするが、ここで注意したいことは、かかる重要性のゆえに『資本論』全体系の決定的契機とされるこの第二篇第四章においてこそ、『資本論』を単なる経済科学にとどめずして同時に哲学的な体系たらしめたはずの方法論的端緒が、潜在しているはずだとするわたしの推定そのものであるが、もし、この予測が確証されるにいたるならば、第四篇の全体系における位置づけの決定的な意味も、十全なものとして理解されることになることができるのではなかろうか。マルクスも次のごとく述べて、この予測の正当さを裏づけているかのごとくである。――「資本については趣きが異なる。その歴史的な実存条件は、商品流通および貨幣流通とともに決して定有しない。資本は、生産手段および生活手段の所有者が、自分の労働力を販売者とし

ての自由労働者を市場で見いだすばあいにのみ、成立するのであり、そして、この歴史的条件は一の世界史を包括する。だから資本は、そもそもから社会的生産過程の一時代を告知するのである。だから、資本主義時代を特徴づけるものは、労働力が労働者自身にとつては、彼にぞくする商品の形態をうけとり、したがつて、彼の労働が賃労働の形態をうけとるということである。他方では、この瞬間から初めて労働生産物の商品形態が一般化される。²⁾——すなわち、商品形態の端緒としての規定性として、常識的に理解されている普遍性ということにたいして、マルクスがその根拠によこたわるものとして賃労働者の実存を指摘しているのであるが、このことは、近代ブルジョア社会の科学的研究における学問的思惟の端緒を、商品の普遍性においてでなく、賃労働者に直接的であるという規定に求めようとするわたしの見地を示唆していると、見ることはできないであろうか。

- 1、マルクス『資本論』（邦訳、青木文庫版）、第二分冊、三一五——六頁 Das Kapital B.I S. 175.
- 2、同右、三一九頁。

さて、さきに引用したマルクスの言葉に含まれている重要な思想とは、古典学派において「労働の売買」とされてきたものが、マルクスによつて「労働力の売買」として科学的に厳密にされ、正確なものとして打ち出されていることに関連する。これについてエンゲルスは『賃労働と資本』の「ドイツ版序文」において述べてゐる。

——「古典経済学は産業上の実践から、自分らが自分らの労働者から労働を買って支払つてゐるのだという、工場主らのありふれた考え方を受けいれた。……或る商品の価格は、その商品にくまれており、その商品の生産に必要とされた労働によつて決定される」とし、発見していたこの派の経済学者が、この「労働」による価値決定を労働という商品に適用するやいなや、彼らは、つまつともに矛盾におちいつていつた。……そして、労

働の売買と労働の価値について語つてゐるかぎりでは、解決不可能な矛盾につまずかざるをえなかつたのである。……リカルド派の経済学者が「労働」の生産費と考えたものは、労働の生産費ではなくて、生きた労働者そのものの生産費であつた。そして、この労働者が資本家に売つたものは、かれの労働ではなかつた。マルクスは言う。「かれの労働が現実に初まるや否や、その労働はすでにこの労働者に所属することをやめる。したがつて、もはや、彼によつて売られるることはできない。」それゆえ、彼はせいぜい彼の将来の労働を売りうるだけである。すなわち、一定時間、一定の労働給付をするという義務を引きうけるだけである。しかし、これをもつて、彼は労働を売るのではなくて、彼は一定時間だけ（時間払労賃のばあい）、または一定の労働給付の目的で（出来高払労賃のばあい）、一定の支払いと引き換えに、彼の労働力を資本家に処分させる。つまり、彼の労働力を売るのである。しかし、この労働力は、彼の身体と合一しており、この身体から引きはなきれない。したがつて、この労働力の生産費は、彼の生産と一致する。リカルド派経済学者が労働の生産費と名づけたものは、まさに労働者の生産費のことであり、したがつてまた、労働力の生産費のことである。こうして、われわれはまた、労働力の生産費から労働力の価値にたちかえり、そして、一定の質の労働力の生産に必要とされる社会的必要労働の分量を決定することができるのである。³⁾」――

ここで、われわれはマルクスの価値論ないし剩余価値論についての解説をすることが目的でない。労働の売買が労働力の売買に変更されねばならない経済学的理由を、一応は念頭におくだけにとどめて、商品としての賃労働者の論理構造の分析に、はいつてゆくための予備知識としておきたい。ところで、マルクス自身も、たとえば『賃労働と資本』では、「労働の売買」なる言葉を使用していたのであるが、これについて、エンゲルスの注意

を聞いておかねばならない。——「四〇年代には、マルクスはまだ、かれの経済学批判を完成していなかつた。それは五〇年代の末ごろやつと完成したのである。それゆえ『経済学批判』以前に出た著作は、個々の点では、一八五九年以後に書かれた著作とことなつておらず、のちの著作の見地からは、歪んでいたり、間違つてきえいると思われる表現や文章をふくんでいる」。⁴——したがつて、本稿において、のちに分析の対象とするところの四四年の『経済学と哲学とに関する手稿』にたいしても、エンゲルスのこの注意は当然ながら適用されねばならない。だからといって、四〇年代のマルクスの根本思想が、——とくにヘーゲル哲学を止揚することによつて成立した弁証法的諸思想が、ブルジョア経済学批判の完成とともに、いよいよ具体化されこそすれ、棄てらねばならぬ理由は何ものもないはずである。むしろ、四〇年代の弁証法的思想のこの具体化と現実化とにおいてのみ、『経済学批判』から『資本論』へと発展する経済学としての学問的体系が、樹立されるにいたつた、考えねばならない。³、マルクス『賃労働と資本』（マルクス・エンゲルス選集、第二巻の上）二六九——七四頁。

⁴、同右、二六七——八頁。

ところで、これらの諸問題の解明のためにも、さらに、さきに提起しておいたところの、学問的体系としての『資本論』の方法論的端緒が賃労働者でなければならないとする主張の根拠づけのために、この賃労働者が論理的カテゴリーとして把握さるべきことが、前提されているのであるが、このカテゴリーとして賃労働者は、如何なる論理的構造をもつてゐるであろうか。

一 ヘーゲル『論理学』における「向自由」のカテゴリー

マルクスの『経済学批判』において、その叙述の端緒になつてゐる物としての対象的商品が、ヘーゲル的カテゴリーであるところの定有 Dasein によつて把握されるべきことが暗示されてゐるのであるが、いまここに、主体的人間としての賃労働者をヘーゲルの『論理学』におけるカテゴリーによつて把握すべきであるとするならば、その最も単純な規定としては、やはり同じように、定有とするほかないであろう。それは、賃労働者が人間として單なる物でないにしても、客体的にみれば一つの対象的な自然物であるから、定有のカテゴリーで論理的に理解しうるというのでなくて、主体的に人間であることにおいても、まさに質的規定性にある存在なし有 Sein として定有なのである。しかし、人間としての賃労働者は、意識ある存在なし定有としては、單なる定有としてだけでは、その最も単純なる抽象的規定性のものでしかない。賃労働者は、その人間的な意識において自己反省することが可能であり、現實に、しばしば自己反省をしているかぎりでは、そして、ヘーゲル『論理学』の範疇的發展によるべき今のはあいでは、むしろ、向自有 Fürsichsein のカテゴリーによつて把握するのを妥当としうるかのとくである。

そこで、現実的賃労働者が、定有によつてではなく向自有によつて、そのカテゴリーとしての論理構造を解明しうるか否かのこの問題を解決するために、われわれは、ヘーゲル『論理学』を、定有から向自有まで辿つておくことが必要になる。ところで、この定有から向自有までの範疇的な自己展開の過程については、その簡単な叙述を、われわれは『大論理学』第二章の冒頭において見いだすことができる。

——「定有は規定された有である。その規定性は、有という規定性すなわち質である。或るものは、その質を通じて他のものに對立し、それがために変化的有限で、ただ単に他のものと對立比較されて否定的に規定され

ていふのではなく、ふしら、それ自身において全く否定的に規定されてゐる。ゆえに、この或るものの否定は、最初は有限的な或るものに対立して無限という形で現れる。そして次に、この有限と無限との二規定を含む抽象的対立は、対立を含む無限性、すなわち向自有のうちに自己を解消する¹⁾。(一五三頁)――

なお『小論理学』によつて、これを補足すれば、「否定性は、或るもの的形式であつて他有としてある。この他有は質そのものの規定であるけれども、最初は質から区別されてゐるか、質は向他有 Sein-für-anderes であり、これが定有、或るものとの幅をなしてゐる」²⁾。すなわち、何々でなく Anderssein とする形式の否定性は、質一般の特殊化された規定として、質そのものの規定ではあつても、それと区別されて、質の向他有、すなわち、或るもののが他のものへ関係する契機なし面にすれど、「このよつたな他のものへの関係にたいして、質の有それをのは即自有 An-sich-sein である」(§. 91, p. 281) と呼ばれる。といへば、この即自有は、否定性の現れるふしの「規定性とは、あくまでも異なるものと考えられるがゆゑににおいては、有の空虚な抽象にすれない」(§. 92, p. 283) ふしであつて、要するに、ただ有るところなどに、実在性をもたないわけである。しかしながら、「定有においては、規定性は有と一体をなしており」すなわち実在性であるが、「この規定性が同時に否定として定立されるばあい、それが限界ないし制限である。したがつて他有 (=何々でない) といふ否定性) は、定有の外にあつて定有と無関係のものと、考えるべくでなく、定有そのもののメントである。かくして、或るもののは、その質によつて、第一に有限であり、第二には可変的であつて、或るもののは有限性と可変性とが属する」(§. 92, p. 283)。ふしの「或るものは他のものにならぬ。しかし、この他のものは、それ自身一つの或るものである。したがつて、これも同じく一つの他のものになる。かくして限りなく統ひてゆく」(2293, p. 285)。

「この無限は悪しき無限あるいは否定的無限である。というのは、それは有限なもののは否定にほからぬのに、有限なものは、あいかわらず再び生じ、あいかわらず止揚されていないからである」(§.94, p. 286)。賃労働者が自分の質的规定性において他のものと映ずるものに次々に変化してゆくこと、たとえば、自分の職場に不満を感じて次々に転職してゆくこと、あるいは不況のために失職させられたり好況におよんで再び就職したりしてゆくこと、この変転の過程において、この変転を無限に繰りかえしても自分の定有としての質的规定を止揚することなく、自分の社会的実在は、依然として何時までも賃労働者にとどまつてゐる。これが悪しき無限である。

1、ヘーゲル、『大論理学』（邦訳、岩波版上巻）一五三頁。以下漢字頁数は、この同書におけるものとする。

2、ヘーゲル、『小論理学』（邦訳、岩波文庫版上巻）第九一節、二八一頁。以下、本文中の節数ならびに頁数は、この同書のものとする。

ところで、このばかり、如何に変転しても賃労働者は賃労働者であるということ、賃労働の種類を如何に遍歴しても賃労働者としての自分の運命をまぬがれえないということ、このことを反省して、自己自身を自覚したとき、これを真の無限といつのである。すなわち——「或るものは他のものへ移つてゆくことによつて、ただ自分自身と合するのである。このような移行および他のもののうちで自分自身と関係することが、眞の無限である。あるいは否定的に見れば、変化させられるものは他のものであり、それは他のものの他のものになる。このようにして有が否定の否定として恢復させられる。この有が、向自有である」(§95, p. 289)。——賃労働者が、その職種を変化したり、させられたりして、如何に嘆いても周章しても、賃労働者たる自分の定有的実在性を棄てえないという生涯の転変を、振りかえつて考えてみると、それは眞実の自分でないところの他の自分を追求していくからでなかつたか、もはや他のものに眼を向けずに賃労働者は賃労働者としての自分を守り育ててゆくべき

でないか、という反省になる。そして、こういうふうに反省して自分自身に関係したときには、眞実の自己を発見したことになつてゐるのである。これが向自有である。賃労働者が賃労働者であることを抜けだそうとする努力において、やはり賃労働者として踏みとどまるべきだと自覚することによつて、すなわち、「他のものの他のものになる」という否定の否定の弁証法によつて、賃労働者としての最初の実在性に帰つてはいても、この実在性の質を自分の本来の規定性として自覺する人間性を打ちたてたことになつてゐる。ところで、この人間性を、自己の賃労働者としての実在性において、向自有的に打ちたてようとする否定性が、賃労働者なる定有の内在的矛盾を構成するものであつた。

このようにして、賃労働者はヘーゲル的カテゴリーとしての向自有によつて把握しえたとするならば、この賃労働者の論理的構造の一層すすんだ規定は、ヘーゲルの向自有の同じく一層すすんだ規定によつて明かにされうるであろう。すなわち、ヘーゲルによれば、それは次のごとく規定されている。

——「向自有は、自分自身への関係としては直接性であり、否定的なものの自分自身への関係としては、向自有するものの、すなわち一者 das Fins である。二者は、自分自身に区別を含まないもの、したがつて他者を排除するものである」。「向自有は、完成された質であり、そのようなものとしては、有および定有を觀念的モノントとして自己のうちに含んでゐる。向自有は、有としては単純な自己関係であるが、定有としては規定されている。しかし、この規定性は、向自有としては、もはや、他のものから区別されている或るものに見られたような有限な規定性ではなく、区別を、止揚されたものとして自己のうちに含んでゐる無限な規定性である」

(§36, P.292)――

そしてヘーゲルは、向自有のもうとも手近な例として自我を挙げている。——「われわれは、定有するものとして、自分がまず他の定有するものから区別され、そして、それに関係していることを知つてゐる。しかし、われわれは、さらに定有のこの拡がりが、いはば尖らされて向自有という単純な形式となることを知つてゐる。我といふとき、それは無限であると同時に、否定的な自己関係の表現である。人間は、自己を我として知ることによつて、動物から、したがつて自然一般から区別されると言うことができる。自然の事物は、自由な向自有に達せず、定有に限局されたものとして常に、他のものに向つている有 *Sein für anderes* とするなし」。——すなわち、賃労働者の実在性としての商品性は、それ自体で自己反省した定有するものとして、商品であり、商品という物であり、したがつて、自然物一般と同じく向他有にすぎず、向自有となることの不可能なものである。向自有となるのは、現実には人間だけである。したがつて商品が向自有になるということは、事実としては、賃労働者という商品における事柄だとせねばならない。賃労働者が賃労働者として、自己の実在性において、弁証法的に反省し、自己自身へ関係し合致するところの否定性が、人間性をいみすると、やさしく述べてきたことも、ここに事実的に明かとなつたであろう。

ところで、この否定的なものの自己自身への関係としての、すなわち、向自有としての人間性は、自己の賃労働者としての定有の、他のものへの拡がりが、尖らされて自己に帰つたものとして、もはや人間性一般でなくして、個別的な自我でなければならない。他の賃労働者の自我を、すなわち他我を、自己から排除する一者でなければならぬ。すなわち、向自有としての賃労働者は、或る賃労働者が我として人間性を発見し、自覚したことであらねばならない。この人間性の自覚は、有としての單純な自己関係、すなわち、我は我である。自分は自

分であるうといった單なる表象としての反省でなく、また、他のものから自分を区別するだけの、定有として規定されていても、いまだ眞実の自己を自覚していない抽象的な反省でもない。多くの他者との一切の区別を止揚して、何れに迷はされず自己に安住しているような具体的な人間性の自覚である。このようなものとして、「有および定有を觀念的モメントとして、自己のうちに含んでいる」のである。すなわち、自己のうちに無限の規定を含んでいるような普遍性であつて、しかも、この普遍性が一者としての自分の内容となつてゐるような自己反省なのである。かかる普遍性をたたえた個別性を個性というならば、この個性の自覚、人間性一般の個性的自覚、これが、われわれ現実的人間の、したがつて亦、賃労働者の向自有としての在り方である。そして、これが、「向自有の、完成された質である」ということの意味でなければならない。

さらにヘーゲルは、「定有は實在性であるが、向自有は觀念性と考えられねばならない」と言つてゐる。これを逆にいえば、向自有の實在性の契機が定有として質的規定であるにたいして、その否定性の契機は、この有限な質的規定を否定的に成りたしめる根拠として、無限な規定性、すなわち觀念性である。賃労働者は、自己の有限な實在的定有において、これを個性的に止揚しえた心境を觀念的に確保してゐるかぎりで、自己の人間性に向自有であり、すなわち人間性を自覺した賃労働者たりうるのである。——「人々は、しばしば實在性と觀念性とを同等の独立をもつて対峙してゐる一対の規定と考え、實在性のほかに觀念性もまた存在すると言う。しかし觀念性は實在性の外部に、實在性と並んで存在する或るものではなく、觀念性の概念は、實在性の真理であることにあり、實在性が即自的にあるところのものとして定立されるとき、それは、觀念性として自己を示すのである。したがつて人は、實在性が凡てでなく、そのほかに觀念性をも認むべきことを承認しただけで、觀念性を正

本当に評価したのだと考へてはならない。実在性と並んで存在するような観念性、あるいは、たとえ実在性を超えた観念性でも、實際は空虚な名前にすぎない。観念性は、或るもの観念性であるときのみ、一つの内容をもつのである」（396. Zusatz, pp. 293—4）——すなわち、賃労働者が、自己の実在性と異なつた観念的な生き方を想像したり、賃労働者としての人間性を超越した人間性一般、すなわち宗教的、芸術的、道徳的、等々の人間性を希求したりしても、要するに自己の外部にある抽象的な観念性、すなわち、いわゆる観念論的なものであるにすぎないのである。賃労働者が、自己の実在性において、この実在性の根拠ないし真理としての人間性をもつたとき、この内容的な自己の実力としての人間性が、向自有としての観念性である。そして、賃労働者が賃労働者として人間でありえているときの、この内容的な観念的人間性において、この自覺的な賃労働者は、同時に、道徳的人間でもあり、ないし芸術的人間でもあり、ないし宗教的人間でもありえているのである。このような完成された賃労働者としての質的規定性が、向自有としての賃労働者である。

三 「労働」から「労働力」への経済学的範疇規定の変更

賃労働者の論理的構造について、以上の論述を要約するならば、その向自由的形態としては、賃労働者的人間としての社会的実在性は商品であり、この実在性において人間性を自覚するかぎりでは、この商品としての実在性を否定せねばならない、という自己矛盾的な構造にあるということができる。この論理構造においては、人間は賃労働者としては商品であるという規定が、その実在的契機の一面をなしている。ところで、前掲引用の『資本論』第四章第三節の言葉によれば、賃労働者は労働力という商品の所有者であつて、賃労働者が、そのまま人

間として商品であること、すなわち商品人間であることが斥けられている。「もし労働力の所有者が、この労働力を、一定の時間ぎめではなしに、一縛めにして一度きりに売るならば、彼は自分自身を売るのであり、自由人から奴隸に、商品所有者から商品に転化する」とマルクスは明言している。マルクスは、また四九年の『賃労働と資本』においても、次のごとく述べていたのである。

——「労働力は、いつも一個の商品であつたわけではない。労働は、いつも賃労働、すなわち自由な労働であつたわけではない。奴隸は、その労働力を奴隸所有者に売つたのではなく、その労働力もろともに、自分自身が売りきりにされたのである。彼は、或る所有者の手から他の所有者の手へ移されうる一個の商品である。彼自身が一個の商品であつて、労働力が、かれの商品ではない。農奴は、その労働力の一部だけを売る。かれが土地の所有者から賃金をうけとるのではなく、むしろ土地の所有者が、彼から一個の貢税をうけとるのである。すなわち、彼は、土地に属し、地主のために収益をうみだす。これに反して、自由な労働者は自分自身を売る。しかも、切り売りをする」¹⁾ ——

すなわち、『賃労働と資本』では、奴隸と賃労働者とは、自分自身の生命を売る点では共通であるが、この生命の活動を一縛めに売るか、切り売りするかに差異があるとされる。またマルクスは述べる。——「労働力を働かせること、すなわち、労働は、労者働く自身の生命の活動であり、かれ自身の生命の発露である。そして、この生命の活動を、彼の必要な生活手段を確保するために、第三者に売るのである。したがつて彼の生命の活動は、彼にとっては、ただ生存しうるために一つの手段にすぎないのである。彼は生きるために働くのである」——と。この言葉によれば、「労働者は、生きるために生命の活動を、すなわち労働を賣つて、そして働く」ということ

になり、したがつて、さきの奴隸との比較における同一性の面が強調されていることにもなり、かくて、両者は、「労働を売るることは共通であつても、それを全体として売らない点で差異があるということになる。がしかしその思想内容は、かかるものとして、その経済学的表現において変更され訂正されねばならなかつたにしても、そして、この思想内容そのものが、すなわち、賃労働者は自分の労働を全体として売つていないという事実の認識そのものが、マルクスにおいて五九年以前にも十分に成立していたかぎりで、後に『経済学批判』ないし『資本論』において「労働力を売る」という経済学的に正確な規定を与えることができたとせねばならない。

1、マルクス『賃労働と資本』（邦訳、マ・エ選集第二巻の上）、二三五頁。

ところで、この思想は、その経済学的表現の変更にかかわらず、マルクスの最初からもつっていたものであることは、それが、ヘーゲル『法の哲学』第一部「抽象法」の第一章「所有」における思想の継承であり、しかも、その第六十七節の本文全体が『資本論』においても引用されていてことから十分に推察しうるところでもある。のみならず、かく『資本論』において出典として参照を求めているかぎりで、この思想は、思想としては、訂正を要しなかつた基本的なものであつたと、判断することができる。——「私の特殊的な肉体的および精神的な諸技能および活動諸能力に關して、（それによる個々の生産物、および）時間的に制限された使用を、私は他人に譲渡することができる。けだし、それらは、この制限により、私の全体性および一般性にたいする外的關係たるにすぎないからである。私の労働による具体的なる全時間、および私の生産（物）の總体の譲渡によつては、私は、それらのものの実体的なものを、私の一般的活動および現實性を、私の人格を、他人の所有たらしむることになるであろう」。——ここでヘーゲルは、人間がその特殊的な活動諸能力を、他人に譲渡するときに時間的に制限するか、

それとも無制限な全時間であるかによつて、賃労働者と奴隸との差別を明確に認識しているのであるが、さらに、この差別にかかわらず、すなわち、自由な労働者であるか奴隸であるかにかかわらず、人間は自己疎外におちいつてることを述べているのであるが、マルクスがヘーゲルから継承する基本的な思想のより一層基本的なるものは、まさに、この自己疎外の思想であつて、そして、この疎外の形態の差異に、マルクスは自由な労働者と奴隸との差異を認識していたのである。

2 マルクス『資本論』第一巻（前掲文庫版第二分冊）二一六頁。ヘーゲル「法の哲学」（邦譯）一〇九頁。

かくて、賃労働者の販売するものは労働でなしに労働力であるという思想は、人間労働の階級的自己疎外といふ基本的思想における更に展開された規定であるが、この思想は、かかるものとして、マルクスのヘーゲル哲学批判期以来から『資本論』の最後まで、すなわちマルクスの生涯を一貫した哲学的・思想であつたと言えるのである。したがつて、五九年以前に、エンゲルスの上掲の注意のごとく、「労働の売買」なる用語を見るとするも、それは古典経済学からの反映であつて、古典経済学の批判の過程において別途この反映的な用語を訂正せしむるのにいたつた原理は、ヘーゲル批判の成果としての右の思想そのものとして既にもつていたとせねばならない。

すなわち、変更され訂正されたのは、右の思想内容でなしに、その経済学的表現だけであつたとせねばならない。ところで、マルクスの哲学的思想は、ヘーゲルのそれのごとく純粹思惟の自己運動として実在的契機を觀念的に表象するだけのものでないかぎり、経済的実在の科学的分析による成果としてのこのカテゴリーを、自己の本質的契機としておらねばならない。したがつて、自己の経済学的表現の変更にかかわらず、全く不变のままに自己を一貫するということは、マルクスをヘーゲル的に見ることによつてのみ可能なことで、マルクスの哲学思想

をヘーゲル哲学止揚——より厳密には、古典経済学批判を媒介にしたヘーゲル哲学止揚——における所産とすることの忘却であろう。労働を労働力に変更するということがマルクス経済学において本質的なものであるかぎり、それにもなって、ヘーゲル批判以来の思想内容にも、その論理構造の改造が成就されていたと見なければならぬ。ところで、賃労働者が資本家に販売するものが、労働でなくして労働力であるという経済学的規定をば、自己の本質的内容とするにいたつたヘーゲル批判以来の思想とは、上述來で自覺的賃労働者の論理的構造としてきたところのマルクス的向自有の論理であつた。

したがつて、ヘーゲルの向自有がマルクスにおいて如何に変改されているかを吟味することによつて、かの経済学的表現における変更を内から規定したはずの思想的根拠を解明することができるとすべきであろう。そして、このためには、ヘーゲルの向自有をマルクスの賃労働者に適用してまた上述の過程を、さらに詳細に分析することにおいて期待するほかないであろう。ところで、賃労働者の論理的把握のためにヘーゲルの向自有の論理を適用するということは、單に、わたしによつて始めて試みたものなどではなく、つぎに述べるとおり、まさにマルクス自身の試みて成功しているところのものである。したがつて、右の吟味は、マルクス自身の遂行した適用の跡の分析として、行うことができるわけである。そこで、わたしは、マルクス自身が遂行したところの、この適用の跡をたどること、すなわち、マルクスが賃労働者を向自有として範疇的に把握している事実を分析すること、このことに、本稿の目的をおくことにしたい。

そこでマルクスが、資本制社会における賃労者の実在性について、上掲引用の『資本論』第四章第三節以前において、如何なる叙述をしていたのであるか、このことを見ることから、われわれは、分析的な吟味を始めることにしよう。マルクスは、四十四年の『経済学と哲学とに関する手稿』の「第一」における「労賃」の項で、つぎのごとく述べている。

——「人間にたいする需要は、あらゆる他の商品のばあいと同じように、必然的に人間の生産を規制する。もしも供給が必要よりも遙かに大きければ、労働者の一部は、乞食状態か餓死におちいる。すなわち、労働者の生存は他の凡ての商品の存立条件に還元される。労働者は一個の商品となつており、もしも、彼が自分を人に売りつけることができれば、それは彼にとって幸福なのである。そして労働者の生存を左右する需要は、富者と資本との気まぐれによつて 左右される¹⁾。「労賃の騰貴は、労働者のなかに資本家的な致富欲を生じさせるが、しかし労働者は、彼の精神と肉体とを犠牲にすることによつてしか、この致富欲を満足させることはできない。労賃の騰貴は、資本の集積を前提し、また資本の集積をひきおこす²⁾。」「国民経済学者はわれわれに言う、起源から見ても概念から考えても、労働の全生産物は労働者に属するものである、と。しかし同時にまた言う、現実においては、労働者の手にはいるのは、生産物の最小の不可欠の部分、すなわち、労働者が人間としてではなく労働者として生存する必要なだけ、また、彼が人類をなく、労働者という奴隸階級を繁殖させるのに必要なだけである、と。また、われわれに言う、凡てのものは労働によつて購買されるのであり、資本は集積された労働以外の何ものでもない。だが、しかし同時に、労働者は凡てのものを買いうるどころでなく、彼自身、および、彼の人間性を売らざるをえないのだ、と。」——

ここにすでに、労働者が賃銀労働者として自己疎外に陥つてゐる矛盾が、マルクスによつて明かに指摘されているのであるが、しかし、この疎外として自己矛盾は、その論理構造において奴隸のそれと異ならないのではなかろうか。奴隸と賃労働者との区別を超えた論述において、賃労働者を理解せしめることになつていないのである。それにして、ここに論述された賃労働者の自己矛盾の論理的規定を分析的に解明するならば、それが向自有の論理構造そのままであることを見ることができるであろう。

まず、賃労働者はその質的规定性において「一個の商品となつており」したがつて商品としての定有である。すなわち、向自有としての賃労働者の定有すなわち実在性は、一個の商品にすぎない。ここで、向自有と定有とのヘーゲル『論理学』における関係を、想いだしておく必要があるが、さきに分析してきたところによれば、向自有とは、質的规定性としての実在性、すなわち定有するもの（＝或るもの）が、自己のうちに直接的に含んでいる否定性を、顯はに定立したうえで、この定立された否定性の否定において実在性に復帰したところの定有であるとされてきた。したがつて、労働者の資本制社会における質的规定性としての賃労働なる商品性が、賃労働者の実在性の契機である。そして、この実在性のうちに秘んでいて区別されねばならないという否定性は、いうまでもなく、賃労働者が人間であることに相違ないが、この否定としての人間性が、商品としての実在性の許に定立されて、そのうえで否定として、この人間性がその資本制社会における質的规定性としての商品という定有に復帰的に結びつくとき、商品という規定性において実在的である人間となる。これが向自有であり、そして賃労働者にほかならない。とすれば、向自有としての賃労働者の論理構造は、商品という実在性と人間という否定性との、区別における自己同一という関係にあることは明かであろう。すなわち、賃労働者にあつては、商品と

いう実在性とその否定としての人間性とが、区別されながら同一であり、人間として商品であるべきでないにかかわらず直接的に商品として実存するほかなく、商品としては人間と区別さるべきにかかわらず人間であるを失はない。この同一性の契機においては、商品は商品として、そのまま人間であり、人間は人間として、そのまま商品である。すなわち「人間商品」である。マルクス自身もまた、この「人間商品」なる言葉を使用するが、そのかぎりでは、賃労働者を向自有的なものとして把握していたものと考えねばならない。手稿のなかで、この言葉は多くの個所で見つけることができるだけでなく、それは、手稿を書いた当時のマルクスの、賃労働者の概念的把握がまさに向自有的であつたことを物がたるとせねばならない。たとえば「第二手稿」の「私有財産の関係」において、つぎのごとくにも語つてゐる。

——「生産は、人間を一個の商品、人間商品、商品という規定における人間として、生産するばかりでない。

それは、人間を、この規定に対応して、精神的にも肉体的にも非人間化された存在として生産する。——労働者ならびに資本家の不道徳、不眞、奴隸制。——その產物は、自己意識ある自己活動的な商品、人間商品である。^③——

ところで、この言葉における人間商品は、人間の非人間化という面の規定をも述べている点で、向自有的論理を完全に表現している。人間は人間として商品であるということは、賃労働者における実在性とその否定性との同一性の面にとどまつていたのであるが、この同一性が同時に区別であるという面も規定的に定立されないと、向自有的論理構造は一面的である。しかし、この区別も同一性とは離れた区別としての單なる差別ではなく、同一性における区別であるから、人間は人間として商品である、という同一性において、区別の契機を定立すれば、

それは、商品という実在的定有に潜在する否定的な人間性を顯はにすることであるから、次のとくなる。人間は、人間性として、その同一性の契機によって商品に結びつくのであるが、商品の実在性にたいしてではなく、その否定性に、商品的実在に秘んでいる否定としての人間性に結びつく。すなわち、人間は人間として商品における商品に非ざる人間性である。しかるに、この賃労働者としての商品は、人間として商品であるから、人間は商品としては、人間であると同時に人間性の否定である。したがつて、人間は、人間性として、商品に潜在する否定的人間性に結びつくほかないかぎりは、商品としての人間性の否定となり、商品という自己の実在性の否定となる。ところで、現実に商品としての実在性を肯定せざるをえないかぎりでは、その非人間性の承認となり、商品人間は人間として、商品としての人間性すなわち非人間性である。したがつて、人間は、その現実的な商品的実在性においては、人間として、そのまま非人間性であり、逆に非人間性としてそのまま人間性である。すなわち、マルクスの商品人間という規定性には、人間のこの現実的な非人間性という矛盾した関係が規定的に定立されているのである。すなわち、マルクスの右の引用句の最初の言葉も、「生産は、人間を商品」という規定における人間として生産するばかりでなく、この規定に対応して、人間を、商品という人間の規定において非人間化された人間性として、生産する⁴⁾といふ自己矛盾的構造をもつてゐる。したがつて、賃労働者の向自有としての論理構造の展開は、かかる自己矛盾を問題にすることでなければならないのである。

- 1、マルクス、『経済学と哲学に関する手稿』（マ・エ選集、補巻4）「第一」の「労賃」二三四頁。
- 2、同右、「第二手稿」「労賃」二四一頁。
- 3、同右、「私有財産の関係」三三〇頁。
- 4、同右、三三一頁。

しかるに、かかる四四年の『手稿』に反して、『資本論』第四章第三節においては、労働者の人間性が、すなわち、労働者的人間的生活の全内容としての労働が、そのまま一個の商品とされるのでなく、その労働の時間ぎめの販売が商品となると規定されているのであって、ここに明かに、その経済学的表現の変更を、われわれは見なければならないのである。この商品としての労働力は、第三節において次のごとく規定されている。

——「われわれが労働力または労働能力というのは、人間の身体、すなわち生きた人間的存在のうちに実存して、彼が何らかの使用価値を生産するたびに運用する肉体的および精神的な諸能力の総計のことである。⁵⁾」——

ここに、これらの「肉体的および精神的諸能力」が、まずエネルギーの「総計」として量的側面においてのみ見られていることは明かであり、そして、この量的規定性が明確にされたかぎりにおいて「一定の時間ぎめに売る」という量的測定も論理的に始めて可能なものとなるにいたつたとすべきであろう。これが、マルクスの労働力についての規定であるが、この規定は、ヘーゲルの先に引用した第六七節の次の言葉に関連する。

——「私は、私の特殊的な肉体的および精神的な諸技能および活動能力につき：：時間的に制限された使用を他人に譲渡することができる。」⁶⁾——

單に言葉だけでなく、その思想内容が、ヘーゲルとマルクスとに共通していることは、さきに指摘したところであつたが、ヘーゲルにおいては、「かかる時間的制限によつて、私の全体性および一般性にたいする外的関係を保持する」ことを目的としたのであり、マルクスにあつては、「自己の労働力を「何時でも、ただ一定の時間ぎめで売る」という条件によつて、すなわち「自己の労働力を自己の所有物とする」ことによつて、自己を人格として保持することを目的とするのであり、この点においては、マルクスは完全にヘーゲルの思想を継承していたこ

とを、ここに改めて、われわれは明確に認識しておかねばならない。そのかぎりで、また、ヘーゲルの『法の哲学』のこの個所、すなわち、第六七節の眞の意味を、マルクスがようやく『経済学批判』以後において始めて理解することができるにいたった程度のヘーゲル批判家とするのでないかぎりで、この思想は、四四年の『手稿』においても、『賃労働と資本』においても、マルクスによって持ちつづけられていたとせねばならない。このことの論証のためには、マルクスが賃労働者の論理構造を解明するために適用したはずのヘーゲルの向自有の論理構造の吟味に再びかえり、そして、この吟味を一步すすめることを試みる必要がある。

- 5、マルクス、『資本論』第一巻、（邦訳前掲文庫版第三分冊）三一五頁。
6、同上、三一七頁。

五 「向自有」における所有関係の論理的規定

ヘーゲルは、『大論理学』の「向自有」の章のA「向自有そのもの」において、次のとく述べている。

——「意識は、そのものとして、即自的に、すでに向自有という規定をもつ。なぜというに、意識は、それが感覺し直観するところの対象を、表象するからである。言いかえれば、その内容を自己のうちにも所有するからであつて、したがつて、この内容は、すでに、かかる仕方で、觀念的なものとして存在する。意識は、その直観作用それ自身のうちににおいて、一般にその否定的なもの、すなわち他のものとの葛藤のうちににおいて、自己自身の許にとどまっている。向自有は、これを限界する他のものにたいして攻撃的、否定的な態度をとる。そして、この否定によつて、自己反省的なものでありうるのである。しかし勿論そのさい、意識の自己復帰お

よび対象の観念性と並んで、また対象の実在性が維持されている。けだし対象は、同時に外的定有として意識されているがためである。それゆえに、意識は現象するものである。すなわち一方、自己と異なる外的対象を認識するとともに、他方、向自的に存在し、対象を観念的に包含している、という二元論——單に、かかる他のものの許にあるのではなく、むしろ、他のものにおいてあることによつて亦、自己自身においてあるという二元論——である。これに反して自己意識は、完成された向自有である。すなわち、かの他のもの、外的対象にたいする關係という面は遠ざけられている。したがつて自己意識は、無限性の現存ということについての最初の例証である。しかし勿論、まったく抽象的な無限性の例証であるが、しかし、この無限性は向自有一般とは全く別の規定をもつもので、向自有の無限性は、なお全く質的規定性を所有するにすぎない。⁽¹⁾——

このヘーゲルの言葉は、われわれに二つのことを解明するに役立つてゐる。一つの觀点は、ヘーゲルの向自有は、その固有の觀念的無限性のゆえに、自らの定有としての質的規定性を、表象としてではあるが、所有するといふ論理構造をもつてゐることを示してゐる。したがつて、賃労働者に適用されたかぎりのマルクスの向自有については、まことに分析してきた「商品人間」におけるがごとく、その実在的規定性としての商品性を、その否定的自己関係としての人間性と直接的に同一化するのではなく、所有という關係において商品性と人間性とを結合することの論理的可能性を含んでいふと見ることができる。とすれば、労働力としての商品とその所有者としての人格との統一としての賃労働者の論理構造も、商品人間の論理構造として向自有が、その可能的な潜在的規定を頭に定立したかぎりの同一の向自有である、と推定することを許すものとすべきであろう。第二に、マルクスは先の引用句において、商品人間を「自己意識ある自己活動的な人間商品」と規定しているのであつたが、ここにおけ

る「自己意識的」と「自己活動的」との二つの規定も亦、人間商品の向自有的論理構造に潜在していたはずの規定として、その現実的に定立されたかぎりの向自有は、マルクスの論理的展開において一層たかい段階に位置づけらるべきものとせねばならないわけである。ところでヘーゲルの右の引用句は、マルクス的向自有のこの二つの規定のうちの前者について、その解説を暗示しているのである。そして、第一、第二の両観点の比較において明らかなことは、所有という関係と自己意識的という規定とは、相互に関連して成立するということである。けだしヘーゲルによれば、自己意識とは「完成され定立された向自有」であり、「その無限性の現存」であるから、人間性の自律としての人格をいみすべきであり、この人格による所有ということこそは、まさにマルクスの労働力を妥当とするはずの関係である。そこで、ヘーゲルの向自有における自己意識の展開の論理によって、マルクスの「自己意識ある商品人間」の論理構造を分析的に吟味するならば、五六年以後の経済学的表現を、内から規定した質労働者の具体的な向自有の論理を、演繹的に抽象することができるはずだとせねばならない。

1、ヘーゲル『大論理学』第一巻（前掲邦訳）、二四九—五〇頁。

ヘーゲルの論理によって理解されるかぎりの「自己意識ある商品人間」の向自有とは、自己の質的規定性たる商品としての実在性を外的対象として定立し前提しながらも、この前提にたいする関係という面を遠ざけるかぎりの無限性である。具体的な意味での觀念性としての無限性である。後に人間の自由として自覚されるべき觀念性としての無限性のその抽象的な例証が、まさにヘーゲルの自己意識的な向自有であるわけである。しかし、この無限性ないし觀念性は、その抽象性においては、すでに自己意識以前の向自有に備わっており、しかも、それに固有のものであつたはずである。このことについては前言しておいたが、ここに今一度、注意しておくならざる、へ

ーデルが『小論理学』で述べているとおり、

——「向自有において觀念性といふ規定性がはいつてくる。定有はまづ、その有あるいは肯定の面からのみ抱えられたばあい、実在性をもつてゐるから、したがつて有限性もまた初めは実在性の規定のうちにある。しかし有限者の真理は、むしろその觀念性にあるのである」（§.95、P.291）。——

すなわち、向自有に固有の無限性こそが、ここに述べられているこの觀念性である。「定有は実在性であるが、向自有は觀念性と考えられなければならない」とヘーゲルもいつてゐる。したがつて、この觀念性は、実在性と並んで存在するような觀念性ではなくて、実在性の真理としての觀念性である。定有するものが、その自らの概念に一致したとき、眞實に実在的だと呼ばれるさいの、この概念としての觀念性である。したがつて、「觀念性とは、或るもの、すなわち、実在性として規定された定有の觀念性として、一つの内容を所有してゐる」（§.96 Zusatz、P. 294）ところの、すなわち、自己と區別された実在性を自己のうちに所有したかぎりの、向自有の無限性のことである。そして、またヘーゲルが「即ち的にそのまま向自有の規定性にあるとした意識」なるものも、まさに向自有に固有のこの觀念性ないし無限性のことであるから、感性的対象の表象としての所有ならば、向自有は、自己意識にまで自己の規定を展開せずとも、意識の形態のまま既にこれを自らの規定として定立しているのである。

しかるに、向自有の否定的自己関係としての固有の觀念的な無限性が、自己反省したとき、意識は自己意識となるのであるが、かかる觀念的無限性を自己のうちに満ててゐる具体的普遍とは、個性の普遍であり、自由なる人格であるとすれば、自己意識とは向自有の否定性の契機が人格にまで具体化されたときの觀念的無限性である

とせねばならない。ところで、自己意識となつた観念性は、自己の実在性から遠ざかり疎遠になるといつても、依然として自己のうちに実在的定有を表象として²⁾所有していることを忘れてはならない。したがつて、「自己意識的な商品人間」も、最初には、自己の商品的実在性を、意識のうちに表象として所有している観念的無限性にある人間性にとどまるほかないであろう。自己の商品的実在性にたいし同一性のうちに区別して自己意識的な人間性は、自己の商品的実在性を単に意識しているだけであるが、この人間性が自己反省して自己意識的な自由な人格者になつたときには、自己の商品的実在性にたいし疎遠になりながらも、依然として自己の観念性のうちに自己の商品的実在性を意識的に表象しているのである。

2、ヘーゲルにあつて、單なる「表象の所有」ではなく、この抽象的規定が具体化されて「外的事物の所有」として展開されるにいたるには、『法の哲学』においてである。——これについては、第一部「抽象法」第一章「所有」（前掲邦訳）七二——一五頁を参照。『賃労働と資本』から『資本論』までのにおけるマルクスの「労働力の所有」という概念の理解のためには、したがつて『論理学』の向自有のカテゴリーだけでは抽象的であつて、ぜひ『法の哲学』の右の個所が分析的に媒介されねばならない。これについては後述を待だれだし。

しかしながら、この「自己意識的な商品人間」は、自己の実在性を遠ざけている観念性として、その人間としての否定性の契機がその自己反省によって否定的なるもの、すなわち否定的な人格になつてはいても、ただ自己の商品的実在性を觀念的にのみ所有しているかぎりの、この実在性にたいし消極的に否定的なる人間にすぎず、いまだ積極的に否定的なもの、すなわち否定するものとしての批判的人間には、なつていないとしなければならない。ヘーゲルは前掲の引用句においても、向自有は、そのままで、「自己を限界する他のものにたいして攻撃的な否定するものの態度をとり」、「意識は、その直觀作用それ自身のうちににおいてさえ、一般に、その否定的な

るもの、すなわち他のものとの葛藤のうちににおいて、自己自身にとどまつてゐる」と述べているが、これは、ヘーゲルが「葛藤」なり「攻撃」なり、すべて同一性における区別の契機を、対立、矛盾、闘争ということを、観念性のうちに把えていることを如実にものがたるだけである。この観念性ということの具体性、すなわち実在性との同一性の契機をヘーゲルも強調するにかかわらず、実在性としての実在性を自己の外に遠ざけたかぎりの観念性にとどまる観念論の強調に、それはとどまらざるをえなかつたとすべきであろう。

ヘーゲルの向自由における自己意識、あるいは、自己反省した否定性は、否定するものとしての積極的な姿勢を備えてくることにはなつていても、その否定の対象は、実在性ではあつても、意識されたその表象にはかならず、実在性としての実在性、否定性と差別される実在性、すなわち意識の外に実在する感性的な対象ではなかつた。ヘーゲルも前掲引用句において、「意識は、その否定性によつて自己反省的なものになりうる。しかし、そのとき、意識の自己復帰および対象の観念性と並んでまた、対象の実在性が維持されている。けだし対象は同時に外的定有として意識されているためである」と述べて、観念性と外的に並べられた実在性を承認し、したがつて観念性と実在性とのあいだの、第三者としてのわれわれの比較における差別性の関係を、注意はしているのであるが、この実在性も、ヘーゲルにおいては、ただ意識されただけの外的定有、表象されただけの実在性、思惟されただけの感覺的実在性であつて、意識の外に実在する感性的な規定性の外的定有は、『論理学』に展開された向自由としてのカテゴリーにおいては、問題にならなかつたのである。

すなわち、「一方、自己と異なる外的対象を認識するとともに、他方、向自由に存在し対象を観念的に包含しているという二元論、單にかかる他のものの許にあるのではなく、むしろ、他のものにおいて有ることによつて自由

己自身においても亦あるという「二元論」の構造をもつ意識としてのカテゴリーにおいては、その向自有的な観念論の立場においてのみ、他のものの許において有ると同時に自己自身のうちにもあるという矛盾——ここでは、区別と同一性との同一性というかぎりの矛盾にすぎないが、——が認識されているだけであって、この自己矛盾的な弁証法にある観念性と、その外にある実在性との差別の承認における両者の同一性としての弁証法、すなわち、意識の外と内との対立の統一としての弁証法、ヘーゲルのいわゆる意識の二元論を主張したところが一元論的弁証法は、ヘーゲルの顧みるところでなかつたのである。そして、これを問題にしたのが、いうまでもなくマルクスであった。

附記——本稿をA「序説」として、以下、

- B 「單なる商品人間の法律的自己意識」、
 - C 「單なる労働人間の生命的自己疎外」、
 - D 「現實的賃労働者の歴史的自覺」
- を予定している。